

# 『播磨国風土記』に見る西播磨における鉄の産地

◎展示している箇所(「↓」があるところ) について

◆宍粟郡 柏野里 (しさはのこほり かしわののさと)

【書き下し文】

敷草村。草を敷きて神の座としき。故、敷草と曰ふ。此の村に山有り。南の方去ること十里許に沢有り。

二町許なり。此の沢に生ふる菅は、笠を作るに最好し。柂・杉生ふ。鉄生ふ。狼・罷住めり。栗・黄蓮・葛等あり。

【解説】

宍粟郡の記事。柏野里は現在の宍粟市山崎町西部の菅野・土万地区から佐用町三河地区、さらには千種町を含む地区にあたるものとされ、敷草村はそのうちの千種町を中心とする地域です。宍粟郡から産出される「千種鉄」は刀剣の材料となる良質な銅が採れることで有名で、江戸時代になっても山中の随所に鉄山が営まれました。真砂(花崗岩が風化したもの)から土砂と砂鉄を分離する、鉄穴流しと呼ばれる工程によって千種川下流部に流された土砂は、江戸時代において下流域の湊や田んぼに支障をきたしうる存在とみられた一方で、土砂の堆積によって赤穂塩田の形成に寄与したという説もあります。

## ◎そのほかの鉄の産地に関する記事

### ◆宍粟郡 御方里（しさはのこほり みかたのさと）

#### 【書き下し文】

<sup>みかたのさと</sup>御方里。<sup>おほうちがは</sup>〔中略〕<sup>せうちかは</sup>大内川。<sup>かなうちがは</sup>小内川。<sup>い</sup>金内川。大きなるは大内と称ひ、<sup>まがねを</sup>小さきは小内と称ひ、鉄生ふるは金内と称ふ。

#### 【解説】

宍粟郡の記事。御方里は現在の宍粟市一宮町北部の三方の元の名前とされ、大内川は繁盛地区を流れる揖保川本流に、小内川は公文川、<sup>かなうち</sup>金内川は河原田を流れる<sup>あじやり</sup>阿舍利川にあたるものと考えられています。このうち、鉄を産する川を金内川と呼んだと書かれています。

### ◆讃容郡（さよのこほり）

#### 【書き下し文】

鹿放ちし山を、<sup>かにはやま</sup>鹿庭山と号く。<sup>なづ</sup>山の<sup>よも</sup>四面に<sup>とをあまりふたつ</sup>十二の谷有り。皆、<sup>まがねを</sup>鉄を生ふること有り。<sup>なにはのとよさきの</sup>難波豊前<sup>みかど</sup>朝廷に始めて<sup>たてまつ</sup>進りき。<sup>み</sup>見<sup>あらは</sup>顕しし人は<sup>わけべのいぬ</sup>別部犬、<sup>たてまつ</sup>其の孫等<sup>そ</sup>奉<sup>そ</sup>発り初めき。

#### 【解説】

<sup>さようぐん</sup>佐用郡の記事。<sup>かにわやま</sup>鹿庭山は現在の<sup>おおなでやま</sup>大撫山にあたるものと考えられます。「<sup>なにはのとよさきのみかど</sup>難波豊前<sup>こうとく</sup>朝廷」は孝徳天皇が在位した<sup>たいか</sup>大化元年(645)から<sup>はくち</sup>白雉5年(654)までのことです。風土記は奈良時代初期の<sup>わどう</sup>和銅6年(713)に調査が命じられているため、この半世紀前にはすでに鉄の生産が行われていたことになります。